

2×4の付加価値パネル生産で提携

ウイングとウッドステーション

既存インフラ活用、相互の利点生かす

2×4コンポーネント大手のウイング(東京都、倉田俊行社長)と木造組建築用大型パネルの生産販売を手掛けるウッドステーション(千葉県、黒岩征夫社長)は2022年12月27日、2×4工法向けの建築パネルの開発、生産、普及に包括的に業務提携した。両社は今後、断熱材やサッシを組み込んだ2×4工法用の建築パネルを開発。ウイングが白井工場(千葉県白井市)で加工した部材を、ウッドステーションが主催する大型パネル生産パートナー会でパネル化し、現場に納入するスキームの確立を目指す。

ウイングは、ウッドステーションのパネル生産技術とデジタル化のノウハウを取り入れ、断熱材やサッシを組み込んだ2×4工法用の付加価値の高い建築パネルの開発と生産管理のデジタル化を推進するとともに、ウッドステーションが持つ2×4住宅市場へ参入するとともに、ウイングの

グの建築パネルを生産受託することで大型パネル生産パートナー会の受注力の底上げとパネル生産工場数の拡大につながる狙いがある。両社はパネル部材に断熱材2×4材を活用していくことも計画している。

ウイングは2×4コンポーネント大手で、白井工場と福岡工場(福岡県粕屋町)、東北工場(仙台市)の3工場で年間2万2000坪強の加工能力を持つ。つほか、グループ会社に北関東ウイング(茨城県筑西市)、関西ウイング(大阪府)がある。白井工場は同社の基幹工場で、加工能力は年間1万7000坪強と単一工場では国内最大。

ウッドステーションとは大型パネルだけでなく、狭小地でも納入できる小割パネルを開発し、狭小地のパネル化ニーズに対応すると同時に、断熱材やサッシを組み込んだ付加価値の高いパネルを生産することで増大する輸送コストを吸収できるようにする。さらにサテライト工場として各地に点在するパネル生産工場(現在5工場)でパネル化すること、長距離輸送そのものの削減を目指す。

既に今年2月に千葉県市で実物件の建築を予定しており、白井工場



契約を交わして提携するウイングの熊本常務(左)とウッドステーションの黒岩社長

大。だが、パネル化には向かない都心の狭小地物件が多いことや加工効率を追求した工場の特長などから、パネル生産比率が低いのが課題だった。さらに、顧客である住宅会社の広域展開などから輸送が長距離化しており、トラックドライバーの時間外労働時間が制限される物流の2024年問題への対応も課題になっていた。

ウッドステーションとは大型パネルだけでなく、狭小地でも納入できる小割パネルを開発し、狭小地のパネル化ニーズに対応すると同時に、断熱材やサッシを組み込んだ付加価値の高いパネルを生産することで増大する輸送コストを吸収できるようにする。さらにサテライト工場として各地に点在するパネル生産工場(現在5工場)でパネル化すること、長距離輸送そのものの削減を目指す。

既に今年2月に千葉県市で実物件の建築を予定しており、白井工場

で加工し、大型パネル生産パートナー会のモック(埼玉県八潮市、榎本哲也社長)の大型パネル生産工場(千葉県)でパネルを生産する計画。

ウイングの熊本常務は「白井工場ではこれまで量を一貫して追求してきたが、これからは質に転換しないと、工場が成り立たなくなる。ウッドステーションの付加価値パネルは当社の合理化仕様であるユニオンフレームとの相性も良く、販売会社から製造会社(メーカー)に転身する良い機会になると考えた。メーカーになることで、従業員が誇りを持てる会社にした」と話す。

ウッドステーションの黒岩社長は「これまで木造組組工法だけだったが、2×4工法に参入することで、木造建築のパネル化を総合的に推進できる。ウイングとの協業により、輸送と2×4の両方で飛躍したい」と話す。